

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

SEPTEMBER
2020

9

市章・町章ものがたり





右上：名古屋市章
右下：西尾市章
左上：犬山市章

ひらがな系とカタカナ系

日本で最も古い市町村章はなんだろうか。定説はないが、記録が残り、かつ現在も使われているものでは、明治22年（1889）に旧東京市の市章として制定された東京都章が最古級のひとつと思われる。愛知県では、明治40年（1907）に制定された名古屋市章が古い。名古屋市民でなくても見覚えがある「丸八」マークは、尾張藩の印のひとつを市章として使ったもの。また、西尾市と犬山市の市章は、幡豆郡西尾町、丹羽郡犬山町が発足した明治22年から使われているとも言われている。西尾市章は「結び井桁」と呼ばれ、旧西尾城主大給松平氏の道中目印とされる紋章で、犬山市章の「丸に二」は犬山藩主成瀬氏の紋章のひとつであるという。



東浦町章「ひ」
大府市章「お」
半田市章
東海市章「とう」
知多市章「ち」
阿久比町章「あ」

では、知多半島で最も古い市町村章はどれだろうか。それは半田市章である。作られたのは旧知多郡半田町時代の昭和8年（1933）で、亀崎町・成岩町と合併して半田市となった昭和12年（1937）以降も使われ続けてきた。半田市のホームページには「半田」の二字を「田」を中心に「半」を外にして図案化したもので、中の円で「和」を、外に向かった八先で市勢の発展を表しています」と説明されている。市町村章は、円形や丸を使って住民の円満・協調・融和・団結などを表現するデザインが比較的多いのだが、半田市章は



南知多町章「み」

先端が太陽や星のきらめきのように広がっている点特徴的だ。

市町村章のデザインにも様々なパターンがある。歴史的な紋章を流用した名古屋市、西尾市、犬山市は少数派で、多くは市町村名の文字を図案化している。知多半島では、半田市と常滑市が漢字系、美浜町と武豊町がカタカナ系、他の六市町がひらがな系という具合である。

では、本誌エリアの市町村章を順に探ってみよう。

南知多町章は、一目見ただけでそれが「み」と理解できる。明快で、凝っては

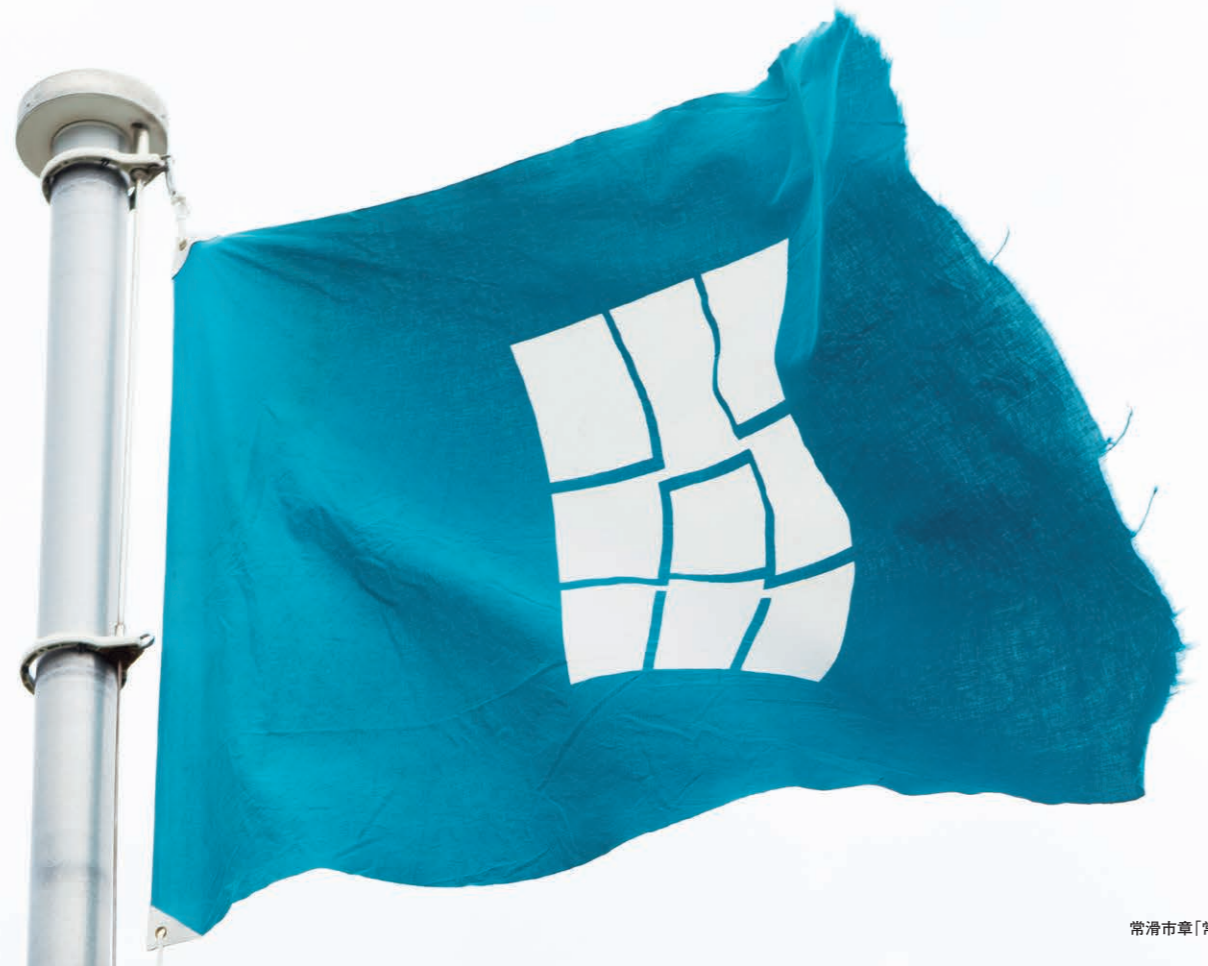
いないのにどこかポップなデザインだ。ラインはやや細めで、一筆で描くことができる形はリボンのようでもある。南知多町のホームページには「みなみ」の『み』を図案化し、平和と飛躍を象徴しています」とだけ説明されているが、中央の二つのカーブしたラインが伊勢湾と三河湾に挟まれた半島を、二つの三角形が篠島と日間賀島を表しているようにも思える。

この町章は昭和38年（1963）に制定された。内海町・豊浜町・師崎町・篠島村・日間賀島村の五町村が合併して南知多町が誕生したのが制定の二年

市章・町章ものがたり



シンプルな図像の中にさまざまな意味が込められている町のシンボルマーク、市章・町章。地元のものは見慣れてはいるけれど、普段はさほど気に留まらないのではないだろうか。市民・町民なら知っておきたいその背景に迫る。



常滑市章「常」

い。当時すでに一流の画家・デザイナーとして名声を得ており、小さな地方自治体としてはなかなか思い切った発注のように思える。初代市長伊奈長三郎の人脈によるものか、あるいは感度の高い職員の発案だろうか。いずれにせよ、市町村章の「名作」は今なお市民に親しまれている。

歴史の中に消えた町村章？

ところで、昭和の大合併以前に存在した町村には、町村章が存在したのだろうか。今回の特集にあたり各地を歩き回ってみたところ、町村章っぽいものいくつか出会ったことができた。

たとえば、南知多町内海の国道247号に架かる内海橋。戦前に架けられた橋らしく重厚で堅牢だが、欄干の隙間に嵌め込まれた鉄細工が、どう見ても内海の「内」を図案化したもの。旧知多郡内海町の町章として使われていてもおかしくないデザインと思うのだが、妄想がすぎるだろうか。



内海橋の「内」



常光山宝樹院山門の「常」

常滑西小学校近くの浄土宗寺院、常光山宝樹院には、かつて本町にあった旧常滑町役場(のちに市役所)の正門が移築され、山門として今も使われている。この門はもともとは領主の屋敷門として建てられ、江戸時代初期の貞享5年(1688)に宝樹院に移築、大正時代の初めに再移築されて旧常滑町役場の正門となり、昭和57年(1982)に宝樹院へ再々移築されたという来歴を持つ。

この山門の鬼瓦に「常」の文字を図案化したデザインがあしらわれている。かつて役場の施設だったのならば、これは旧常滑町章ではないのか? 住職に聞くと「このデザインの由来は聞いていないが、瓦はのちに葺き替えたものだし、山号の『常光山』が由来だと思



武豊町章「タケ」



図書館のキャラクターにあしらわれた美浜町章

前なので、合併後の町政運営も軌道に乗ってきたところで、そろそろ新町のシンボルを作ろう、ということになったのではないだろうか。町章決定を伝える「広報南知多」第六号によると、町民を対象に公募したところ二百十六点の応募があり、審査の結果、内海の住民の作品が入選作として採用されたようである。

美浜町の町章もシンプルだが、円や曲線を用いたデザインが多い中で、三角形というのはなかなか珍しい。美浜町は昭和30年(1955)、河和町と野間町の合併により誕生し、さらに昭和32年(1957)、旧小鈴谷町のうち上野間地区を編入して現在の町域になった。町章制定は昭和36年(1961)。

1)。三角形の三辺は河和町・野間町・上野間地区の意味を持ち、三つの棒(ミ)を組み合わせて「ハ」と「マ」の字を表している。

この町章も公募により決定したものの。七十九点の応募作品の中から、瀬戸市の人の案が採用された。「広報みはま」第二十一号には、以下のような入選者コメントが掲載されている。

「三本の棒状▽によってガッチリとスクラムを組み美浜町を躍進させること、又どのように解説しても『ミハマ』と読んでいただけると信じます」。

それぞれ気風が異なる三地区が肩を組み一致団結して発展しようという思いが、デザインの中に込められているのである。

杉本健吉、常滑市章を作る

他にあまり類を見ない独特のデザインで異彩を放っているのが常滑市の市章である。

合併翌年の昭和30年(1955)に制定されたこの市章は、甕を連想させる逆台形の中にタイルのような四角形が並び、常滑が窯業で栄えてきた町であることを暗に伝えているようである。一見するとただの図形だが、よく見るとある文字が浮かび上がってくる。そう、常滑の「常」の字だ。見慣れている市民ならば誰でも知っていることかもしれないが、常滑市出身ではない筆者が初めてこれを見たときには「常」の図案化であることがわからず、凝視してようやく「あ、なるほど!」と気付いた。

この市章は公募されたものではない。作者は、画家の杉本健吉である。美浜町に杉本美術館があるので、知多半島の人にとっても馴染み深い存在だろう。

杉本健吉は明治38年(1905)、名古屋の生まれ。愛知県立工業学校の図案科を卒業後、戦前からグラフィックデザイナーとして数多くの観光ポスターや旅行雑誌の表紙絵・挿絵などを手掛ける一方で、岸田劉生のもとで研鑽を積み画家としても活躍する。知多半島にも早くから縁があり、幼少時には



右上: 杉本美術館
右下: 名古屋交通局
左上: 名鉄百貨店



何度も海水浴に訪れ、戦後には名鉄や観光協会の依頼で海水浴場や知多四国霊場のポスターなども制作している。名鉄グループの後援により昭和62年(1987)、八十一歳のときに杉本美術館が開館してからは頻繁に通い、知多半島をテーマにした作品も制作した。

常滑市章は、グラフィックデザイナーとしてのセンスと技量が存分に活かされた「仕事」である。杉本健吉の手によるロゴマークといえば名鉄百貨店、名古屋市営地下鉄、青柳ういろうなどが代表作だが、いずれも見る者の脳裏に焼き付けられるインパクトの強いデザインであり、常滑市章もその系譜に連なる。

著名人の作と公言されている市町村章は全国的にも珍しい。しかし、どのような経緯で常滑市が杉本健吉に依頼したのか、詳しいことはわからない。



武雄かめ太郎

6)に小学校が作ったキャラクター「武雄かめ太郎」にもこの校章があしらわれており、時代を越えて親しまれているようだ。

うかとはもかく、かつての武豊町のシンボルマークだったとみなしてよさそう
だ。
しかしこのマーク、今もどこかでよく目にするような気がする。記憶をたぐつて、はたと気が付いた。なんと、武豊小学校の校章と瓜二つではないか。それが表紙の写真である。
学校で調べてもらったが、この校章がいつ制定されたかは判明しなかった。このマークを参考に校章が作られたのかもしれないし、あるいは校章が先にあり、好デザインなので武豊町報のタイトルロゴに流用したのかもしれない。いずれにしてもかなり古くから使われていることは間違いなく、武豊の象徴が武豊港だったことを伝えている。
ちなみに、昭和27年(1952)に制定された武豊小学校の校歌の一番には「衣が浦の朝ぼらけ／出で入る船に波しずか／開化の潮いち早く／寄せてかおれる／学舎に」と、武豊港が詠み込まれている。また、平成28年(2016)に小学校が

古い例を探す中で、どうやら武豊町の町章にはあまり知られていない変遷があるらしいことに気が付いたので、最後に紹介したい。
現在の武豊町章は昭和49年(1974)に制定されたものである。町のホームページには「武豊(タケトヨ)の『タ』と『ケ』の合成で、力強い横線は町の発展を、上下の曲線は調和を表現し、全体は羽ばたく鳥のイメージによって、明るい将来を象徴しています」とある。太いラインが逞しく、産業都市として成長

を続けていた当時の町の勢いを表しているようである。
ところが、昭和49年の制定というのは知多半島五市五町では最も遅い。武豊といえば、明治19年(1886)の武豊線開通、明治24年(1891)の町制施行、明治32年(1899)の武豊港の開港場(貿易港)指定など、近代を華々しく歩んできた有力自治体なのに、遅すぎはしないだろうか。
調べてみると、どうやら現町章以前に使われていた「先代」があるらしいことが判明した。それがこのマークだ。
ひらがなの「た」を図案化したと思われ、上部のあしらいは錨、もしくは鳥のイメージだろう。今回見つけた最も古い資料だと、昭和26年(1951)発行の「町制六十周年 武豊町沿革町勢要覧」の裏表紙に掲載されている。また、昭和29年(1954)に富貴村と合併して新・武豊町が発足したが、その記念行事の写真に、子供たちが日の丸と町章入り小旗をもって行列している様子が写っている。
おそらくこの町章は、合併前の旧武豊時代に作られたもの。合併後もそのまま使われたものの、旧富貴村とは関係がないため町民に浸透せず、合併

武豊町章の知られざる歴史

う」という返答だった。とは言え、旧町章である可能性も捨て切れないと思うのだが、どうだろうか。
常滑市北部の矢田に工場がある常滑牛乳は、おむつ姿の赤ちゃんのトレードマークがお馴染みだ。その赤ちゃんの背景に三つの輪が描かれている。これは、常滑牛乳の所在地がかつては知多郡三和村で、当初は社名も「三和牛乳」だったことに由来するデザインという。もしかして、三和村章ということはないのか？
各市町の資料を漁ってみたが、残念ながらこれらが町村章であるという記録を見つけることはできなかった。



常滑牛乳



灯台をイメージして作られた武豊小学校南門

先人はふるさとへの思いをマークの中に込めた。

〈取材協力・資料提供〉常滑市秘書広報課／武豊町秘書広報課／美浜町秘書課／美浜町図書館／南知多町総務課／杉本美術館 常光山宝樹院 写真の丸岡 武豊町立武豊小学校
〈参考文献〉図説日本の市町村章(小学館)／都道府県章市町村章のすべて(望月政治編・日本出版貿易)



武豊町報のタイトルと記念サイン



さらに古い資料を探ると、戦前に旧町が発行していた「武豊町報」に町章らしきものを見つけた。タイトルの「武」の部分に重ねた錨が描かれているものだ。これは明らかに武豊港をイメージしている。これだけでは単に凝ったタイトルロゴだが、ある号では左のようなスタンプ風の記念サインが掲載されており、その中に錨と武のマークがあしらわれている。町章と呼んではいかど

二十周年のタイピングで改めて新町章を制定した、ということではないだろうか。

合併記念行事で旧町章入りの小旗を手に行進する子供たち(岡田彰氏撮影、写真の丸岡提供)

